

## 往復書簡 (後編)

新潟県の農業経営者 丸田洋さん (有限会社穂海農耕 代表取締役) に、分散錯圃やマーケットインを意識した取り組みなどについてお話をいただきました。

拜啓 高木 勇樹様

夏も本番となり、猛暑の日々が続いておりますが、日の出、日の入りの時間の变化に秋への移ろいを感じている今日この頃です。

この度はご返信ありがとうございます。お褒めのお言葉を頂き、恐縮するとともに、自分の考えを見つめなおすとても良いきっかけを頂き、感謝申し上げます。

さて、分散錯圃についてですが、解消されないと効率が低下するとともに、リスクが上昇するということはおっしゃる通りだと思います。一方で、分散のメリットもあると考えています。そう考えるきっかけになったのは、平成24年にここ板倉で起きた大規模土砂崩れです。この際、上越地方の水田、約3,000haを潤す用水が土砂に飲まれ、春からの作付が危ぶまれたことがありました。実際は、ほぼ予定通り作付できたのですが、弊社は、圃場が分散しているため水系が複数に分かれており、一つの水系が絶たれてもすべての圃場で栽培できない事態は回避できる、ということがありました。この他に、病気やフーン現象など、局地的に起こる障害も必ずありますので、分散はリスク低減の側面もあると考えております。

とは言え、分散しているいくつかのエリアの中で集積されている方が効率的なことは、やはり変わりありません。すでに30aの圃場が10枚ほど続いているところも出てきました。そういったところでは、今後地主様ともご相談させて頂き、畦畔を抜いたりすることにより一枚の圃場をより大きくし、一層の効率化を推進することも視野に入れております。加えて、より一枚でも多くの農地を預けて頂き、農地と農地の間が埋まっていくことで、この分散錯圃の解消にもつながると考えております。そのためにも、作業を行う社員には、「挨拶をすること」「圃場に草を生やさないこと」「作業後の片付けを綺麗にしておくこと」等を徹底して行ってもらうようにしています。それが、最も手っ取り早い方策なのかもしれません。販路についても重要な課題だと認識しております。弊社では、「みづひかり」や「みずほの輝き」という、新潟県ではそれほどメジャ

ーではない品種を中心に栽培しております。これは弊社のお取引先である、実需者の方が求められている品質に適合している品種だからです。私どもは、B to Bを基本とし、このように実需者の皆様の求める米を作るというマーケットインのスタンスを基本としています。また、新しい品種なども実需者の皆様にご提案できるように、情報を日々収集するとともに、毎年、新しい品種を試験栽培し、そのノウハウや品質の確認なども行っております。

一方で、ただマーケットインという事だけでは、品種によっては作期が重なり、投資がかさみ、経営効率が落ちることも考えられます。このため、作期や栽培のしやすさなど生産現場の事も考慮するようにしています。こういった取り組みを進め、長期的な視点でより大面積になった際にも確実に販路を確保し、効率の良い経営ができるように考えております。

また今回も非常に生意気な事を申し上げてしまいました。この続きは、是非、新潟の誇る日本酒を傾けながらお話をさせて頂ければと勝手ながら考えております。

まだまだ暑い日々が続きます。くれぐれも熱中症などに気を付けられ、ご健康でいらつしやることを心よりお祈りしております。

重ね重ねありがとうございます。失礼致します。

平成二十七年八月吉日

稲の花薫る板倉の一室より

丸田 洋 (まるた ひろし)

1974年 新潟県上越市生まれ  
2005年 新規就農で有限会社穂海農耕を設立  
2011年 株式会社穂海を設立  
主な事業内容は、農産物販売やJGAP導入指導などのコンサルティング(株式会社穂海、水稲栽培や農作業受託(農業生産法人 有限会社穂海農耕))



敬具

拜復 丸田 洋 様

お盆で帰省（群馬県松井田町）中にしたためています。

今ちょうど、午後二時少し過ぎの暑い盛り。さすがのせみも暑さの中、鳴き疲れたのか、風が木々を揺らすだけで外は静かです。暦の上では、立秋を過ぎ、正に残暑厳しい折ですが、自然を相手にされている貴方らしく、日の出、日の入りの時間の変化に季節の移ろいを感じられるとのこと誠にもつとも感じ入りました。

小生のように朝寝の者には日の出の時間は無理ですが、田舎のため樹々が多く、木の葉を揺らす風に秋を感じる時があります。経営規模と分散錯圃、販路の課題について経営者として誠実に確な回答だと思います。

分散錯圃の解消と集積のための実践活動に通底しているのは、地域とのつながりを大事にすることで、「信頼」を獲得すること。日常の挨拶など「急がば回れ」を大事にすることと理解しました。このふたつは正にビジネスの要諦です。

また、自立自助、リスク回避の基本でもあります。

これをビジネスモデルとして構築し、新潟県はもとよりまず日本全国に拠点づくりをし、実質的な経営規模拡大につなげて欲しい。

このモデルは必ずや行政が後追いをし、現行の変更、更には新たな制度・システムへと展開していく契機となると確信しています。早ければ三〜五年以内に。

販路の課題についての取組みも、安倍政権下で漸く本当の意味で市民権を得た「産業としての農業」「経営判断、販売戦略による作物選択」を先取りしたものと受けとめました。

貴方にとつては稲作農業として当然の取組みであったからこそ、十年間で基盤づくりに成功したのでしよう。

私の夢は、世界で主流の米（長粒種）づくりなどあらゆる需要にこたえられるグローバルな（海外生産も含め）総合的米産業、更には食料産業へと御社が進化、深化していくことです。この夢の実現は二十年後で結構です。

この話題は酒席にふさわしいですね。

平成二十七年八月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ

一九六六年 東京大学法学部卒後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

農林水産事務次官、二〇〇一年退官

一九九八年 農林中金総合研究所理事

二〇〇二年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任

二〇〇三年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

二〇〇七年 現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

